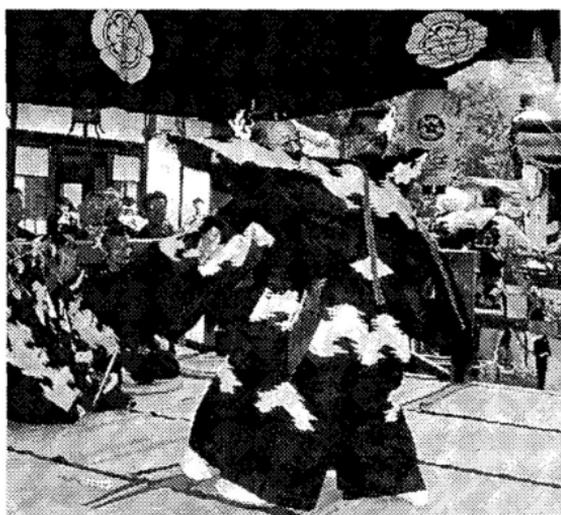


やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

1982(昭和57)年の秋、その後何度となく訪れることになる東山中(大和高原)の秋祭りを初めて見てまわった。1日目は奈良市興ヶ原の天満神社、邑地の水越神社、阪原の長尾神社。近辺の神社を広く義務していた富井吉一宮司の車に同乗し、その夜はお宅に泊めていただいた。翌日は朝から大保の八坂神社、柳生の八坂神社、再び阪原と廻った。

この頃は10月16日がヨミヤ、翌日がマツリで、翁舞・田楽・相撲などの特色のある神事芸能が各地各様に伝承され、大変興味深かった。柳生では、長老で組織する十二人衆じふににんしゅうによるスモウの舞・ササラの舞・ヨーカの舞の三つの舞が舞台で奉納された。終わると黒の素襖すむつに侍烏帽子姿の藪田勇太郎さんが、紙切れを私にくれた。歌が書いてあった。今その紙切れが見つからないのが残念だが、お渡りをして足元がおぼつかなくて烏帽子が揺れるという歌だった。この日は朝から、まず当屋で酒宴を催し、それから神社にオワタリをするのが習わしで、侍烏帽子の後ろには、紅白の紙垂しづりが垂れていた。



柳生の神事芸能(スモウの舞)。ヤー、オーのかけ声で抱き合う＝筆者提供

歌を詠み贈る習慣

即座に詠んだ歌をいただいたのは、ここだけで、奈良市ならいの吐山はきでも経験した。吐山には、大太鼓はなかつた。都祁村つとけ(現が七つも登場する雨乞いはなかつた。

の太鼓踊りが伝わり、その聞き取り調査をしたときだった。小柄で笑みを絶やさないあるお年寄りからやはり歌をいただきたい。折に触れて、歌や俳句を詠み、訪れた人に与える習慣が伝わっていたのだ。それからは、神社の歌や俳句の奉納額などにも自然に目が向くようになったが、文字はかすれ、よく分からないことが多かった。

古代に万葉集が編まれた大和の地では、中世には和歌の上句と下句を交互に詠み連ねる連歌が詠

まれていた。宇陀市染田には、地侍が連歌を詠んで結束を強めた作例や舞台となった連歌堂が今も残る。「染田天神連歌」は大和に根を下ろした文学活動で、そうした生活の場で営む和歌・俳句・川柳など短詩型文学は、今も県内各地で盛んだ。おかげ踊りが伝承されている山添村やまぞえ菅生では、この芸能の元保存会長、田畑茂代さんが俳句を作り続けている。「母の日に母常のごと野良着かな」「やはらかき陽を打ち返す豆筴」「使はざる村の大井戸注連飾る」(句集『山の辺』より)

(奈良民俗文化研究所代表) 次回回は10月9日